繪本忠臣藏 後篇 二

中村進午文庫
文庫5
702
12

繪本忠臣藏後篇巻之二

目録

○義徒懇法界寺　○同図
○附近松家僕以誠忠感其主　○同図
○義徒等過酒肆　○同図
○両使到千戸氏邸図

所属 HBS
V
514 2
図

所属 HK
中村健文庫
番号 342
2

昭和五一 十二月
中村本天氏贈寄

昭和三十二年十一月二十七日
法学部研究室より移管

文庫5
702
12

○川瀬寺岡掉小船先諸士到泉成寺図
○義徒等祭首于墓前○図匠
○其二
○泉成寺和尚給酒食於義徒等図
○遠森遺留物鍳巾信管紙號図

以上

繪本忠臣蔵後篇巻之二

義徒鎧忍法累寺

初めゝざるこゝ解くハ古聖の云なり分大星の徒よく始終を遂るといふ歟〜扨も義徒ハ相議とりて仁本言外援兵程を待べゝ義可べゝいざ法累寺まゝ引くゝ退去れ更去ゝ変血戦〜忠臣の暑を〜くゝ家に寄うゝしめんゝ各いさゝて言聖氏の裏門より猶へを立てくゝ高る時に五更乃天色明月西よりひさ長廉東にかゝやけり一昇の撲雲遠山よりこと紅気の風ハさゝに白雪を拂ふくさむく部ゝの鶏鳴報ゝ陣頭の狗吠ひゝ長〜ゝ大星三軍堀井九十郎俳義衆ちの三士ハ行よ後ゝ行ゝ中ゝ介ゝ徒ゝ御ゝ敵して

義士
法界寺の
門前へ
憩ふ

近松
嘉儀
基二郎
義士
蜜柑
おとべ
餅を
おくる

いろく若ふの厚さ実よ踏止がくしとゝへども人各真主あり而ハ
濕ひ屋ゝ様ハ家ハ今ゝ新宅のゝ為ハ孤立の秘く独りを表事
因縁の新宅ゝ様ハ家ハ今ゝ新宅のゝ為ハ夫若ふの主を何ゝ様ハ
主昼夜よ泣よ〻こゝく他家の士をゝ〻ふ時ハ徒党を集り
の織ゝ長利家のゝ為ハ若ふ〻ハ悔ひ〻ハ若ふ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ
親戚朋友のよ〻〻〻〻〻〻〻〻義を知ハ〻〻〻〻〻〻
らよ杉ゝく三士ゝ山半とゝひゝ義徒ふ〻別ゝ〻ハ〻〻〻〻
今此生別離ハ終よ是死別離ゝ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

あらざれば大墨刑罰よむしひ今ハ一刻も早く鎌成寺に行先君
の墓前に拝謁し　さらば長利家の裁判を待く潔く切腹
せんのみなり刑一封の告状を携り芳田忠左衛門遠藤右士の
二人命じて長利家に到らしむ右士ハ長をうけうく長ます清士
に喉を告長利の廳へ　そなたの方ハ遠藤の
ら人てまつり老人まつひ手負の面く　弥先てまつ塚伝をこそ
[illegible]

[illegible]

[illegible]

○繪本忠臣藏後篇卷之二
甚三郎
滅忠
迫松
感
む

怕ようとなり五一りしも機緩ぶれば又逢よ来もあらぬ命一と
波あぶしにやうれば甚三郎は大よ皇後しあひこは清之丞の恨
を深くも存せば宮こも絶しもしも絶しもしもしもし

あらし孫ちらのこれをそこ後清水よりも石ゐこれんこの雑有さよ涙
に出頃よりの所有拾ゑて源さ沢あるの中あ〜こんしたぜに
拾ろう推量上しにくるべ潔ちこ山中ねうあし涙と流し
感しちりかくこと後ちちみくこもに法名とちりかう対
後よ夜討の姫に生ちこ〜ちうぐ文石刑渠よりうあじとたせて
石連しこ義士示門ゑしこ花月へざうしろう遠江あれ寄相餅ぐ
と酒へこ有しちあり法界寺より人こ遠よりう孤の法度へ
り渡ちうくと始終義の形の清ふくく対添ってでもちりうそ
後義使ホ切腹ありく泉涼寺に葬ちうはいつくこうこあくえ
甚三郎ハ寺僧に請ふく剃髪し名ぐも改め元介と称し考る
墓守と掃除しくありしこ遠よこ後ちる所をちっべいとこ

義士等過酒肆

ちう行よ法古ホ法界寺の門前ちくく行本家の近所を待ちいつぐる時
列をちつしくあちくちれバ今ハ一列も早く泉涼寺に参ん人と流仮
参ちて列を乱さび歩ませけるこちよ法度忠臣といふりの
あり形ちう早く起出ちく店の戸障子ちよ開張縁人一様の装
東各般紅に染ちしくちう矢と脇ぐちひあり刀差と雅ちるわり
衣着ちれちと見ちく大よ驚ちこの家ちこ一戸と又須ちへと
ちうとちよ法大勢の軍勢巾ぬくちて忠義ぐちあいちちうち部
ホ寒ちに喝渇ちれバ何のちくちも薄ちりのと与へちいふちう赤
ハ酸寒股栗大よ怖ち地よちよ踏ちくく酒ちよ部ちちう酒の
ちく点今起ちこ山ちと未今のちこ樊ちこ山ちちうちよ大

義経
薙刀
剣ゝん
抱戸を
通る

鱸を捕へ酒を一杯喜まれよと結士来と招くに亭主先へ腰うち
うけく仰へ〳〵忠清基こゝろ〳〵居酒の後ハ堅く奉
の所法度にて〳〵ことわるとも振し捨れば大鱸大のうつ〳〵ひ
彩〳〵ハ流よ天下の大法を背せ〳〵あり豈居酒おごの須細なる
事に論あ〳〵人や之酒代を奉ん〳〵とよ〳〵鼻紙袋より出し〳〵
扱出〳〵庫よりあり合芦鷹ぶ〳〵の印牛板を引提出絵の石寄して
注をうつ〳〵ふり茶碗ぶ〳〵〳〵〳〵とひ沼〳〵にわ〳〵いさ長絵の
〳〵石三杯を喫〳〵洗ひ〳〵るゞ大鱸を矢立とり〳〵鼻紙〳〵
書付ける

山とも殺〳〵力も土〳〵〳〵松の雲　不葉

こ吟〳〵ふ〳〵ぶ〳〵お項羽帳中の粉あり〳〵感〳〵〳〵かゝる紙

に大墨三平再び墨汁切〳〵池あり矢〳〵〳〵〳〵ちよ〳〵こゝび素
を流よ印刷ヒ〳〵て渡り〳〵途中ロ〳〵ロのあり〳〵ひ〳〵と一面み
ま〳〵〳〵〳〵〳〵如法男ものの門前よ矢間石の印絵のこゝ有〳〵絵
持ふせ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵に池印り智と印文挺雇ひ有り
老〳〵ひび色貴のあ沼〳〵〳〵素〳〵〳〵ふ扇〳〵ふこ三平が働と大〳〵感
永あ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵三平ハ刷〳〵も告び何方に〳〵主〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵人〳〵
不審ふ〳〵ぶ〳〵に〳〵る（時三平、人に先立て、紙成寺に出る）初三平彼絵と矢間の石〳〵
中〳〵徳〳〵名〳〵〳〵たるハ絵印に沼の絵冊を付〳〵〳〵

報ゆるいと〳〵ゆ〳〵〳〵〳〵ふ乃恥ある世〳〵ハ初〳〵や初〳〵とや

藤姓之末江刈浦生之藤流矢間結内

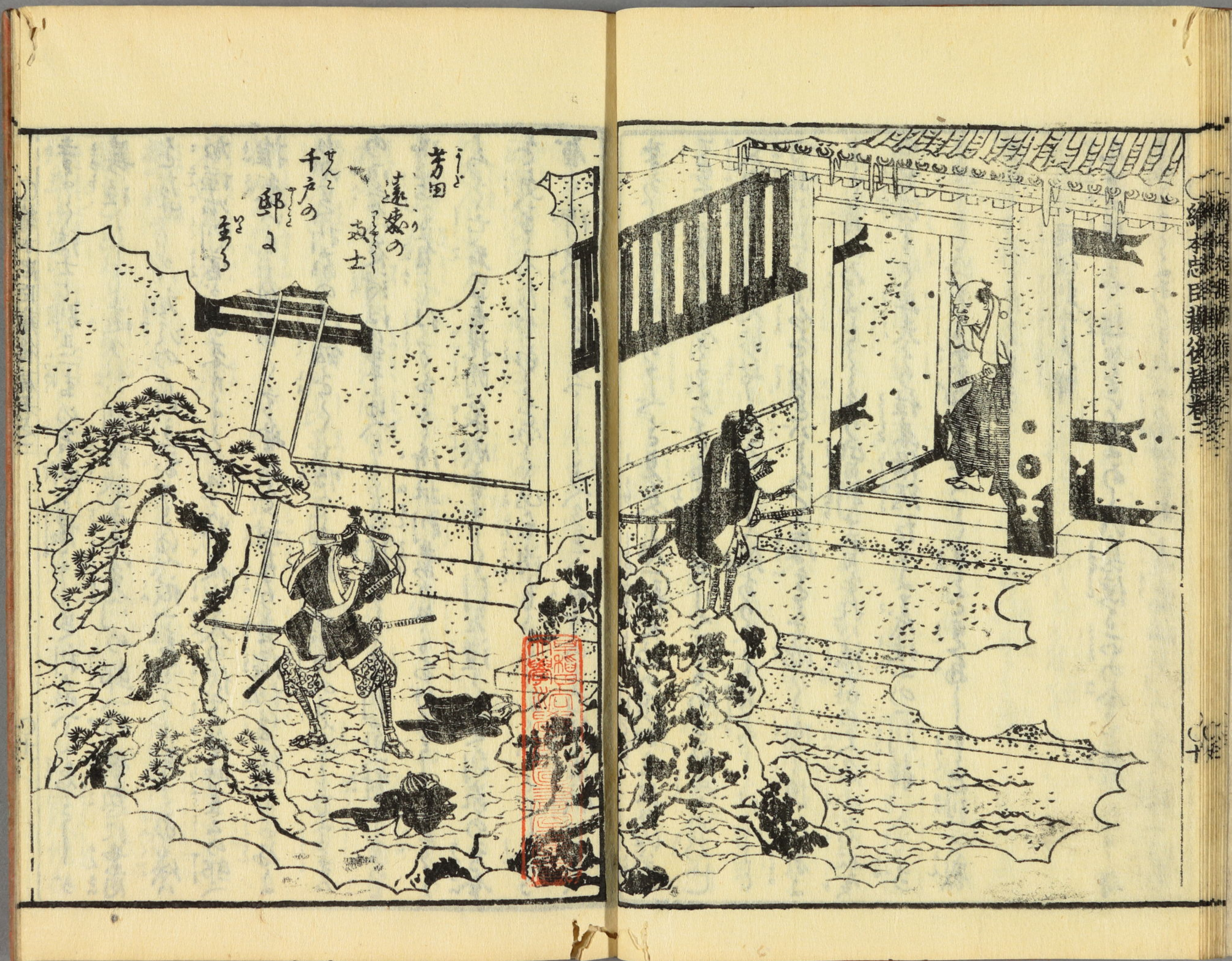
と〳〵〳〵たれ〳〵ありかく〳〵て結士来ハ打〳〵〳〵と賀のものとハ先〳〵〳〵〳〵せ

各別を示し〻く押立ろう強くよ設すく〻言を恵蒙彼紙入を開
まるろよ一和の金子あり表に元徳十六年十二月吉日堀内刑部が家
来大塚文吾寸死骸を持ち方へ酒代と称ろうこよりよろく
恵蒙も初く義使たるこを知り密柳号を携ろく見利郎へ
こ名ろうること法士示便乃あれば扇が合ひろう加利支が旧
郎を打添ひ同さ船〻流涙をでなーにろ時よ奥列線河
某が郎あを打ろるに辻番のもの立おて各の挿柳よつねよ
わ〻び船〻結ろへ制止〻門内へ入ろるが郎吏おあり
各ハ行方より何方に通りひでゆ同小大望ろ〻く実年
をろ〻これを告げ法よ先列見利家へ寄ろ迎〻其命を伺
んろ泉成寺へ引ろ〻ろ郎吏大り感激〻左柳の仁

年ろ〻ば行〻に止めゆ〻でさ見吏ろ如一列実状の仁ろ左ば恵
て見利郎ろうの今ろよ〻く仁ろ船ろ〻せ〻ろあ見海ろの打巳
一入仁号もひろんに船〻仁入ろ〻蹴ありろ〻ろよろ〻ん〻
叮嚀ろよろ〻しんを付見ばろるく厚ろ左源〻謝〻揖礼者よ
〻〻再びろよろ〻〻ろう皆列ろ音ろれば法郎の大名小名ん賀
の也嫁〻く早夫ろう種来絡沢たろよ義使ホの一列静〻〻ホ
ろせ〻〻ろ〻いでよろ来ろ〻せ〻ろ〻ろ〻ホ見ろ〻〻ろ名列ろ感
ぜぬろのろてろろろろ

両使到千戸郎

九使の雑ろや雑ホをいろよろ〻び真使ろ郎の金ろ辱〻ホ辱
〻ひろ〻〻〻よろろ〻れば女面仲右恵つ遠麦祐恵つの夫士ハ法ろ法男

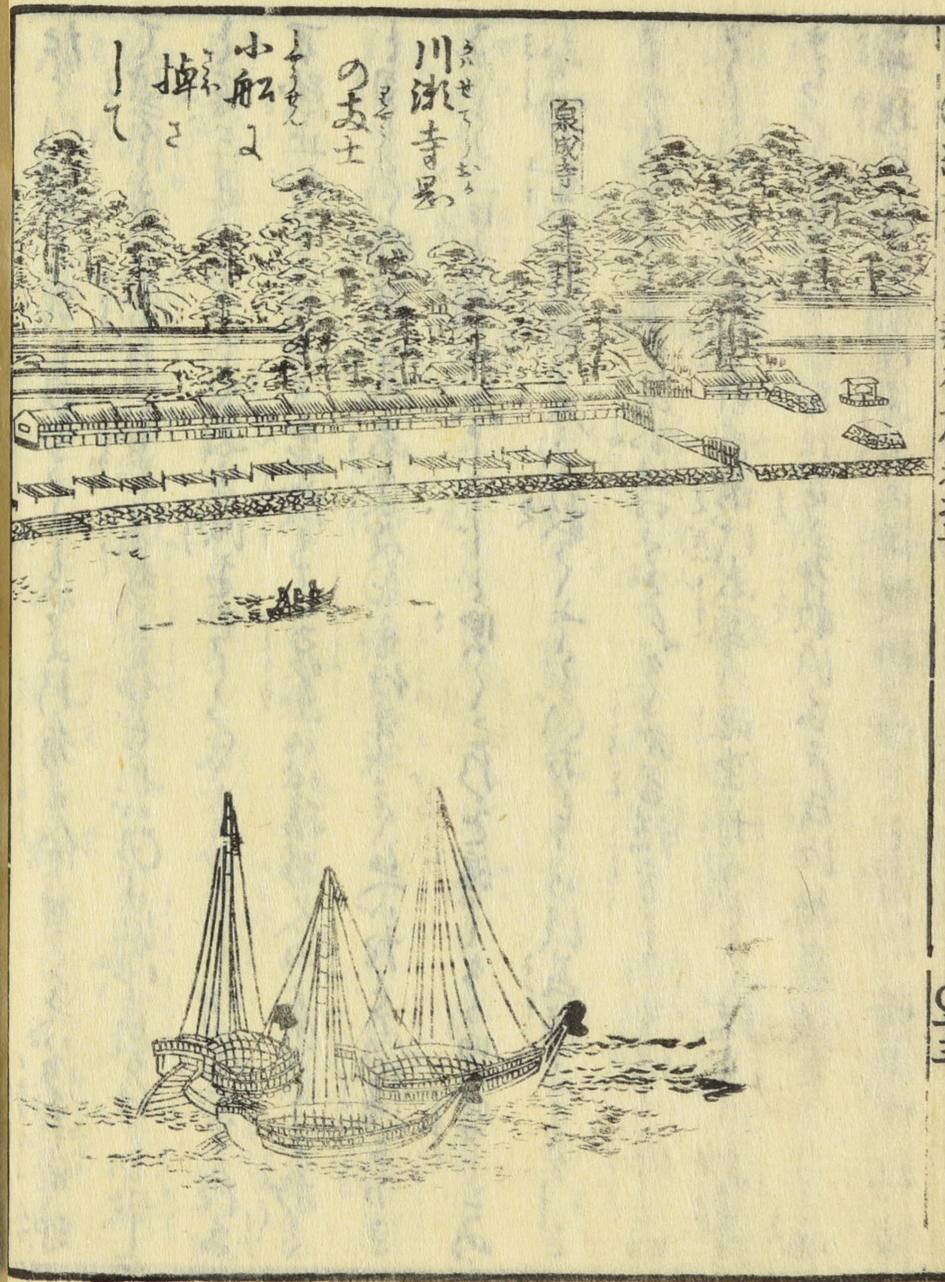

うど
芳田
遠藤の
武士
せんと
千戸の
郎と
ろう

寺まゐり法士と別且二通の告状を懐ろに足利家へ訴ゆるが
甚だ怪しき遠方れば別執政の戸多門の邸へ行願懇に書面
をなせしが彼の方の人の立ち寄るゆへ彼一通をとりもつて後ハ
加藤治判官が家来なれば昨夜主人の使ひ堅師直の邸へ
推参いたし雑掌に対面なせ直切後仕べき旨申ゆ
ゑ足利家の御鉢を恐れも怪うして殊更陸奥の方にして
の国方へ夜討仕り来りしも非渡よりて足利家へ対し
御然も有るべき仕方なれば御扶助願ひ申あげ奉り
よつて亡君の菩提所泉成寺まゐり元蓮ぐ足利家の手命
を受まうんたんなれば泉成寺ハ名ばかり御
願ひ御披露なるべしとの趣旨ハ取次の人別告状と受

立ち寄遠方を進せしに戸氏逆ひ碁盛歌せし
疎忽なる仕方波士を侍通し廣間に通し
に役人ども打ち寄つて亡君の響き湯とかり来りあるを
くまづ浅見なるしつぎ廣間に使ふ人あ士ハ
持参りし淡を真清門あるよ亡君に
通ひ毎月ごとに戸氏逆ひ対面あり趣く名月ハ
神妙の振舞感ずるなれば別状の告状披見せしに
右連名外一人も漏しハ無しかわ弱ら且で士を
拵へ作のごとく有り外に一人もこれ且あるべ別段
筋もこれあるハ立ち扣へ申べくハ
何卒御先を尋り一刻も早く亡君の墓参り湯一ぱいとく

まことにも阿波の殿の御ゆるしあらばこそ戸氏ぞ出業あり〳〵名いづれども
忠直の人柄志ゆかしく貞操せ〳〵上八幡のうらひ丸さ去なぐら
代儀素一人の同志も相ゆるぬ是ぞ豊後おはしけり西遠一族藩よ
及び御下知を待くまを遠方陸中へ流れ給ひよりて相結ぶ
ら敵代支度あり〳〵彼人間〳〵もまうり武士八人せうらと〳〵
ぞ是非あく迄よ踏強し七所ら役人ども八命をうけ〳〵りてなと
待よ安藤主殿一茶をこそ彼是地元なり〳〵国郡〳〵料理
〳〵のハ〳〵も拵へくさぐあ〳〵此度湯漬をこそ
ちらべ〳〵ぬ士のおれさ〳〵とも出で武士大よ勢ぞ〳〵て彼八流
れ是利家の大法を相せ〳〵因人間おるよこ八勿論五極ゆ八板と
庵く礼儀〳〵敬く義をかるれど役人ども相とら〳〵答方よハ

たと〳〵ひ出さるるとあるよも世よ打角を人や対さ〳〵ハ出業出郎
て代方〳〵もの藤器にお〳〵遠或よ極どれば〳〵に出ゆうけらさし
と毒三毒巳ア〳〵よ武士流をもち〳〵く〳〵ゆるし御屋志流ゆ
万踏止かう〳〵出ども泉家ゆよ毒五に接服人のものども新く
と同じく昨夜以来未ぞ付すぐく出ハばたらひ強るもさ
ら〳〵〳〵一日も恨よハ入ア〳〵さじ〳〵と思くこうを辞し〳〵ゆ出ぞ〳〵の
我心の至さん感じ入く敬く〳〵ゆ〳〵びあとゆめ八其儀よこう門さ
〳〵ろりかく〳〵ゆ戸氏おはいく〳〵ゆ〳〵ゆ安達方ゆうも遅く流とゆ
ア〳〵〳〵〳〵れ是利家よハ赤代赤軍の昭事なうく〳〵結月の義を
まちく〳〵なるれ〳〵〳〵なれば出〳〵敬び戸氏に接察使まく〳〵流
毒意義鞠のとげ甚上の評議御〳〵〳〵列接察使松田



義徒より先達て泉成寺へ

六左衛門にそそのかせて主人戸氏と和睦せ城を
て別宅戸氏の邸に移るべきあるべき事の次第と語らるに
士達夜討の次第すでに終を
の者ども人々等これあるべきの外一事も別除こ
きあれよ中上られば彼ばば其方書付にしるしてあるに芳田
仲左衛門迎間ばかりを通にあ徳右衛門を
拔ばかりに紙中にあるべき俳諧あるべの載刑
お結びしとく又おはの脇あれば右衛門氏ひいこ仰付
るの名細かこまつくれば舟に御座のすべも
先別もやはり辛抱の間泉成寺へ逃
および戸氏別松田氏に渡せ別条もこれ

あけるば勝手に計ふべきなるべし身らる右衛門氏これよりよく大よろ
こび迎城を出るべく迎に泉成寺へ
義士等祭酒于墓前
さる行よ川流忠左夫寺長平右衛門の右衛門氏の貢をうけ永法士
とこの毋氏の邸を別をまぐ明がこのふぐこに私を中しい人右衛門氏
先逃く泉成寺にいこの門を中業間八寺中のあるべ伺事中
人こ二人がこの法をこの右衛門と同
ざれば右衛門士別ばぐに夜討の次第とあがこの大星以下の法士も
あく悪く先君の墓前に渡
墓前に渡くべ中ばかりこのこのあるべ
かくこと敬ざるべこのこの和尚よ迎せんと
和尚ぐ墓迎門をひこの世右衛

義経主
師直

首級と
墓
おくる
祭る

尊儀

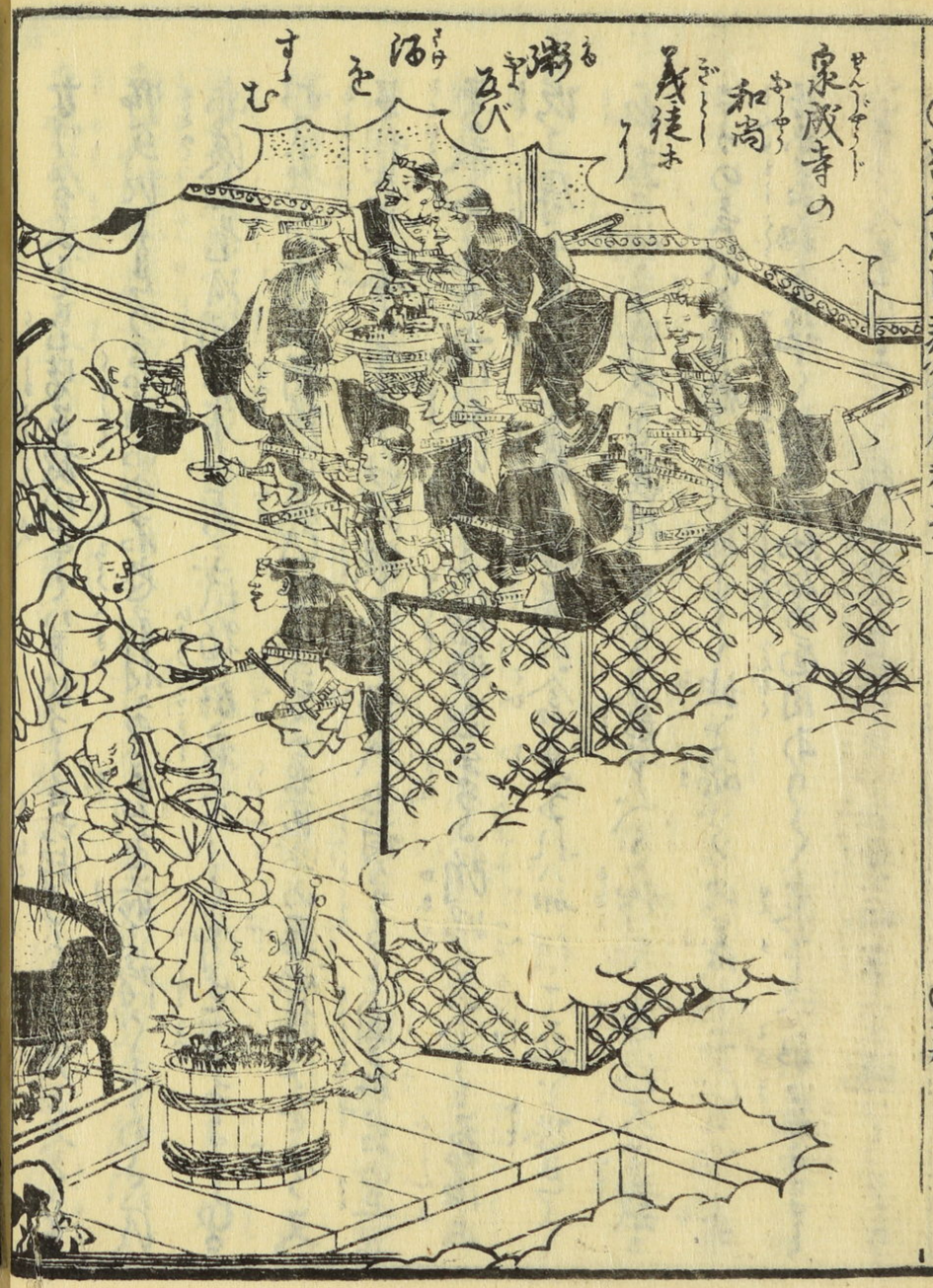
其二

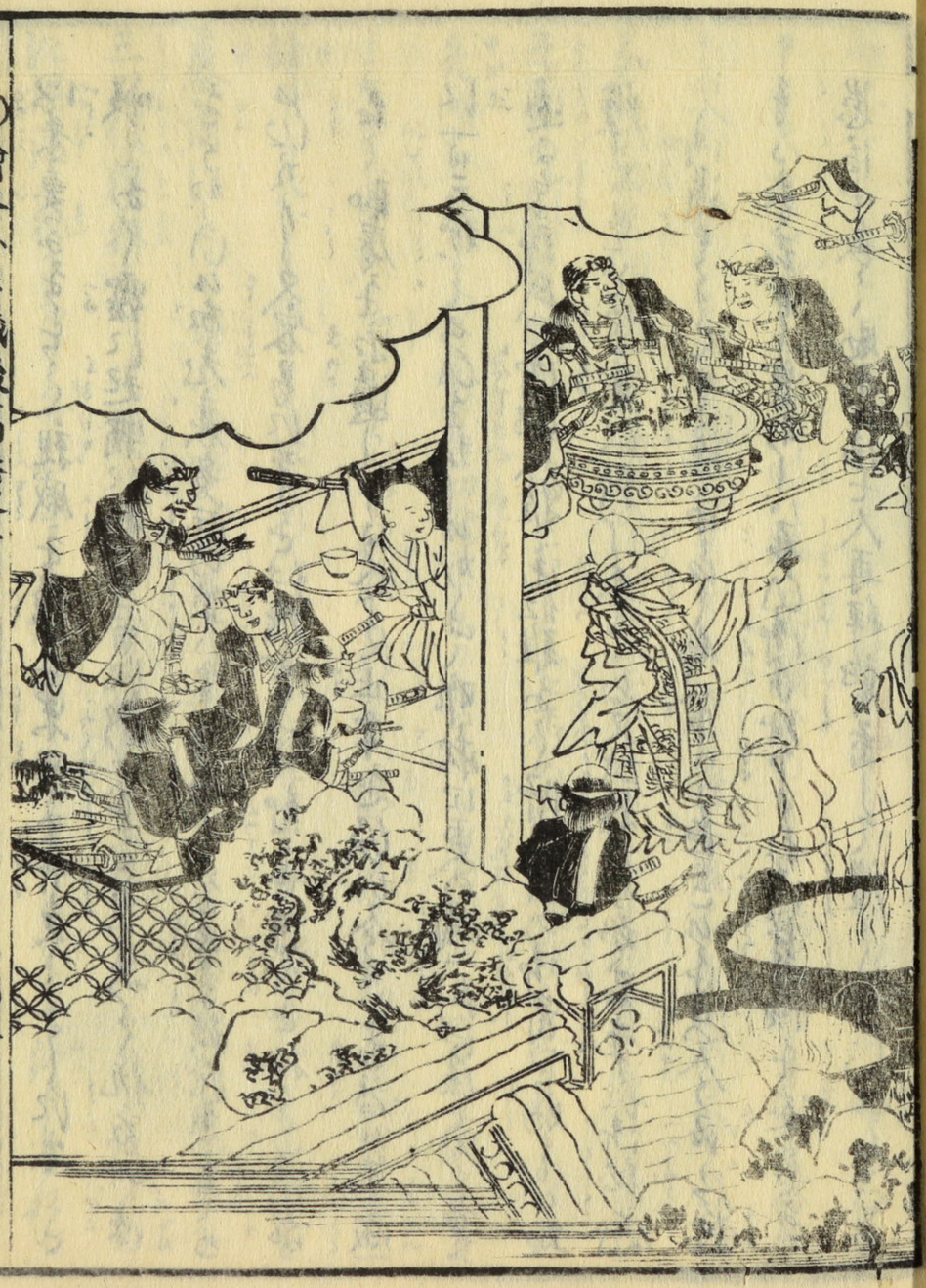
を大石よ墓参しゝ為殿に仕へあらは主君和尚よ申つくゆゑに
こ助中付しよハ代半仕なる節へ相勤る時ハ直様討死とさゝ
らゞゝ是よりよつく永く墓所に申ると云大切の御首
あるとゞんを付へきとゝ
べゝらよ和尚たゞるゝとに出られん是迄山門及びゝ隆の門く堅
須ゝく中ゝゝゝ旦法士為りこハ貴よりの働よく云ゝゝ隙奏よ
堀ぐゝんゝ別門をゝゞく鄰をたゞ毛禁戒たりしゝゝ酒
をもりよせ是のあるとに地をゝがらく樊岩とこに
俵づりゝゝゝ人ゝゝ為ゝ結ゝゝ形よ大星三年独為り
法士お表あく云多程あく為ゝゝゝ越どれハ也平ん馬
大よゝゝゝび基石迎へに来ゝゝれよ形のゝ

へゝゝく起ぐゝく池りゝゝ法士よ形合く形く形ゝ
山門に徒ひ来ゝ寺内へゝけ入く方丈にくゝく越どれハ和尚也候
お迎ひ大星よ對しく涙く来ゝ義雪と感嘆し法士と延く対面
彼ゝゝあゝよ大星是を御し何らも仏本家の討申ゝりがゝれば
一刻も早く墓所よ渡しゝたゝゝゝ
ゝつゝ侍僧に命ぜく堀治氏の墓所に卓を設け毛花を供へ
侍者よ命ぜく法士の例よ来く法用を修せゝゝらかゝる形ゝ沒
毛よ延ゝゝ芳田遠藤の両士息ゝもつゝ池ゝゝり毛戸氏の命を
ゝく大星よ是と告れハ大星迎てよ門使扶く各方に五星ゝ
人ゝの中ゝ拵せゝに為るかせなゝ沸付ゝひゝゝく大よゝゝこひ沒よ人
数もゝゝひゝゝハいゝゝ墓所よ毛白人と各盟瀬川酒ゝ拵ゝ

野氏の首をよく洗ひ清め三宝よりの世大星にあたへ雪
と穿く者を女せバ中にく助うやく〳〵三宝とさゝげ石塔の地
覆等二段になるゝ〳〵亟又情中より帛紗に包み短刀とり新
図〳〵ゝと等一段に亟自〳〵一紙の祭文を認め三拝稽首〳〵〳〵
さるゝゝよりとりもよひ文にいはく〳〵
維元禄十五年十二月十五日尊君恩顧之臣大星由良介を始寺島
平右衛門に安藤合印猛士人〳〵素代再拝稽首〳〵尊君〳〵霊位
に告奉る去年三月十四日我君野氏を及傷よ及びのひ〳〵こと愚
臣ホの縛知る所よあ〳〵べ〳〵いとゞも寡よ寡〳〵ゝ寡〳〵ゝ知よ
我君涙怨積怒之事ほ〳〵く〳〵て止事を得ざるあり強ひて
野氏其命を全ふ〳〵〳〵我君の〳〵死を賜ひ〳〵〳〵に国家とも没収

なゝ〳〵ふと見落公義の上しハ中なゝ〳〵甚起るとゝろハとく〳〵
野氏によりて忠臣ホの不忠不材なる是を前よ防ぐこゝろ〳〵
亦深く見分潤ふ事を去っゝ〳〵猶家名をゝ〳〵御生害あるゝ〳〵
ゝ〳〵なゝ〳〵御家断絶に及び臣事家名臣ホの罪也強ゝを今又
是利家の命をもうけ〳〵復に野氏を討ゝるゝ国家名の上を
ゝる教ゝ〳〵ゝふ御仁に背ゝ〳〵ゝ罪を重る所以〳〵いへども臣ホ
況よ辱も恩顧を蒙ゝを俸禄に合ゝ力ゝ死ゝ怨ゝ
家名の仇ゝる野氏を其作ゝよゝ亟中べゝ仰て世に天を戴ゝ
ざるの云にゝ俯〳〵そハ同じ〳〵地を踏ゝるの義ゝ〳〵ゝ
臣ホ若恥を抱ゝく相果い如何の面目ありく泉下に家名ゝ
へゝゝ〳〵ゝ見にゝよりゝく窮よお企各死を以お推去始事ゝ謀ゝ〳〵り


泉成寺の
和尚
義徒ホ
湯
を
すむ



以来妻子をもとゝく親戚を離れ東西に奔走し〻に安き
暇しなく露に起霜に臥一日二日に粥一合を甘じ〻く仇家の涙
をうかべ山谷老衰多病の年八年の逆ゞを思ひ数孔をとゝの
ぶれり又容易に年を仕換ぶる時ハ却て世の笑を招こ法永
若し恥辱を御遺し〻人うし止年を過ぬ今日とお活ル年滅
に一日三秋しらひをなし〻かゝて昨叡臣更の須一列に張七人と奉
逆よる野氏の御邸へ推参仕雖あく師直公の御首を賜ゝの
潅ぐ是と言る霊に敬じ奉るぬ又武経刀ハ永若年に清秘御
し御通もゝく先逆て中ゝ敵に下し逆ひ仕只人うぬ上
きる新若り霊あ〻ハ再ひ御名弥下さし御替情を遂せ
愚臣中良〻助ホ口括七人再拝敬して潅ぐ白ハ

ゆゝでよく終且ハ皆一同に感涙し〻弱し神をぞ志ぶり今ハ時よ大望
ゆゝる八七若御左世の御時ハ法士若職なのゝ下秋孫のゝ多ありの
とい〻ゝも今かく義を頼ゝるゝ〻く八度ハ厚薄後のゝ多別あ〻ハ代孫
ふよ伏夫間氏ゝ野氏の御前を拝られし年滅よ武運よるひ
ゝる霊の御仏ゝも納受ゝ法ゝなゝ一番の燒香相勤ら〻ゝ〻に
夫間ゝるおぐろゝ布基初陰を名ゝ山も見則流ゝの世ゝ山ゝ
して皆一人の功ゝ〻ゝへや仕後よ杉ゝハ敢く命に志ゝ代ゝ再三
辞ゝ〻ゝれゝも衆ゝも仏ゝを押せゝ逆よ十ゝ所もゝ山ゝ〻ゝ
墓前ハゝゝ姓名を唱へ燒香ゝ彼経力をゝ〻ゝ野氏ゝ貢を
三刀伐供拝ゝて返けゝ夫ゝ八墓をゝ〻ゝ力ゝ山ゝ一人ゝ生
に摂津の親を〻ゝ各形のゝ燒香ゝ法ゝ〻ゝ終ゝ〻ゝ

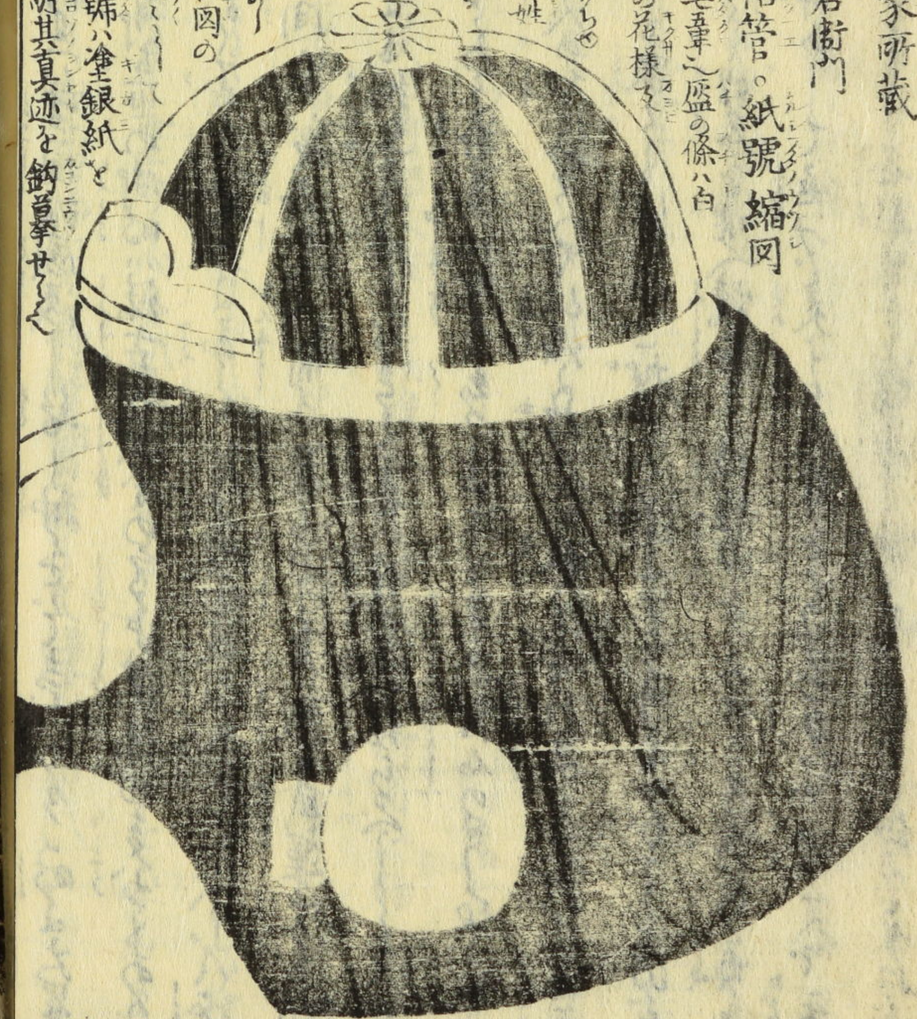
江州　或家所藏

遠森祐右衛門

○鍪巾。信管。紙號縮図

鍪巾表ハ。(て皇章)盛の條ハ白縐紗。(て頂上の花様を)紐ハ紅縐紗をりて鍔の白紋ハ綿布を姓名を記し縫者を裏ふとて堅帝をふさく亀甲文をして屬を鐵糸をいくてて革鍾とす

たちのく。信管図の如く之を吹ハ亮くして清音あり。紙號ハ塗銀紙をりて寫ハ所其真迹を鈎摹せく



○世ゝ義士ハ夜攻の器械ゝゝゝ往ゝ藏もる人有未其真偽ハもとゝハ其傳ふる所も正ゝくして其全體の結構皆素より花番を飾ハ專ゝ防禦の備ハ心をりつひたら是其真ゝもる所以かゝるゝゝ之を寫て聊美擣の想ハまつるゝ

森、祐右衛門

正図

觀瀾堂
春帆

大星彼經日をりるのごとく懐中し宇野氏の貢を和尚に托し
宗家手向もおゐて今八年目にあたるなる御貢より以ぐ
持参ゆゑ悔わりつるしうびハ何年の事中に拾ゝ年拾ゝ
ゆゑ〳〵しとのされしうバ和尚刎頸掌し侍僧に命じ亦者
に対面せしむ旦法士に向ひ先ゝ少よわうるべしとゝ法士
中よも老人を負の重く拾年の寒風の堪ねく庵上の樓夫と
えるとりうるくるれよ庵りうく法力の凍を暖ゆうゆく粥も
熟せしうじ為飯に飯盛をとゝらく法士を近へうく手ゝ名し
ちさゝに大ゝ酒よ酒をあらうこの和尚をとらの今日し
年八寺中といでも常法よかゝらに樓を破くゝ八各一盃を
しゆくとわるゝ義法ふゝゝ和尚のゝをとらるれしりてゝ

大よ感悦しゝ彩く法よ去中の枯骨にもひゝ以分ゝ人ゝや
肉仕生ゝしゝふの御芳志いつの時よ報ひゝ人しおりのくにゝ
を喫粥終喫く大よ英気をでまゝ時よ大星ゝうゝ
わ たのゝ ゝ八ゝ分拾ゝ浮世の月よかる雲ゝ
し流ゝられバ岩野氏ゝ次よ瀬踏を立て八

そのにわひ雪ゝあゝの野梅ゝ

冷ゝつるく奥ゝるくよいづるゝ穴氣ゝ地よ付信
しなゝひ行本家の討手何方わりとゝ敵とゝ撃ゝうかくし
大星ゝ岩を拾ゝ一和の書をゝ後宮猫獄院の方へ遣せしゝ
旦夜討の相談ゝう墓前に手向ゝ年ゝ月ゝ八ゝ伝ゝ仕ゝくゝ
ゝくゝ合途中人の沖中ゝゝ八衣服と更ゝ

○繪本忠臣蔵後篇巻之二

何事なりとはよく立せてで者ゝ[illegible]る叶ぬ大星三平八侍潛よ吏
つゝ給仕をしてありくるゞ大星是を見届き度よいとてくゝ
厚き心入何程ゝ執篤ゝてゆゞ先別もゝ[illegible]の一回思くゝ[illegible]
し半ゝ[illegible]で義よたゝへは半ゝ[illegible]せん[illegible]ぬ[illegible]とゝ[illegible]ゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ